



『走れメロス』 定番授業の先へ

前南アルプス市立甲西中学校校長 松野 まつの ひろと 洋人

第二学年の三学期(後期)に、『走れメロス』(太宰治)という教材が配置されています。長きにわたって採用されており、先行研究も数多く目にするのですが、この稿では、これまであまり授業で取り上げられてこなかった視点から、この教材を見つめ直してみたいと思います。

1 これまでの授業の傾向

―登場人物の心理を読む―

これまで『走れメロス』の授業で最も多く行われてきたのは、故郷からシラクスの王城へ戻る途中のいくつかの困難と、その困難な状況におけるメロスの心理の読み取りを中心とするものでした。このような授業が問題だ、と言っているわけではありません。これらの困難を克服し、約束の刻限ぎりぎりに王城に到着したからこそ、わたしたち読み手は感動させられるわけですから。

2 学力意識をもった意図的な取り組み

―「自分の考えをもつ」ことに着目して―

教科書では『走れメロス』の学習目標は、「二項目記されています。登場人物の考え方や生き方について、自分の考えをもつ。描写や会話に着目しながら、登場人物の人物像の変化を読み味わう。」
(傍線筆者)

この「自分の考えをもつ」という学習は、今話題の、いわゆる「PISA型読解力」でも求められていますから、これからは、このような学習をより重視していくことになると思います。これは、少し新しい方向性です。これまで以上に学力意識をもって、意図的に取り組んでみてはどうでしょうか。

この「自分の考えをもつ」という学習は、今話題の、いわゆる「PISA型読解力」でも求められていますから、これからは、このような学習をより重視していくことになると思います。これは、少し新しい方向性です。これまで以上に学力意識をもって、意図的に取り組んでみてはどうでしょうか。

3 ささまざまな視点からの学習を提示

―リズム・仕掛け・呼称―

(1) 感動生成要因としての文体に着目する

この教材を読んで、わたしたち読み手が感動させられる要因の一つは、間違いなく、命を賭けた友との約束を守るため、幾多の困難を克服して定刻までに王城に辿り着こうとするメロスの意志であり行為です。

しかし、それだけではありません。この教材の文章は、音楽的・律動的なリズムをもつて書かれています。わたしたちはこんなにも感動することができるのです。ただ文の長短を生徒に指摘させるだけでなく、音読によってその事実を体感させてほしいと思います。

(2) 仕掛けについて考える

第二は、山賊の登場についてです。王の差し金によるものかどうかについては、何も持っていないはずのメロスへの、「持ち物全部を置いていけ。」「その、命が欲しいのだ。」などの山賊らしからぬ言葉から、王の命令で登場したと考えるのが普通でしょう。では、王は山賊たちにメロスを殺させようとしたのでしょうか。確かに山賊は「命が欲しい」と言っていますが、王はメロスが戻らないことを願ったのでしょうか、あるいは、少し遅れて戻ってくることを期待したのでしょうか。王のメロスに対する心理を考える切り口としても、興行きのある課題だと思います。

第二は、フィロストラトスの登場についてです。さすがに、メロスを遅参させるため王から差し向けられた、という解釈に立った授業は目にしなくなりましたが、では、彼をそこに配置した目的は何でしょうか。彼とメロスとの会話を吟味し、この時点でのメロスの心理を考えてみることで、課題の出口が見えてくると思います。

(3) 登場人物の呼称に着目する

メロスについて、教材の中では、ほとんど「メロス」という呼称で出てきます。例外的に「彼」(P173 L2)「勇者」(P174 L1)という呼称が使われていますが、特に「勇者」には評価意識が含まれています。友との約束を守り、「信実」を身をもって示すことで、暴君ディオニスの人間性をも変えてしまった、そのことに対する評価です。

王の呼称については、「王様」「国王」「王」「暴君」と使い分けられています。その背後にある心理・評価について考えてみたいと思います。

『走れメロス』には、まだまだ多くの切り口があります。指導時数や指導目標を踏まえ、多様な実践が展開されることを期待しています。